

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制（農薬使用基準等）等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 花き

発行日 平成21年 8月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

病害虫防除を徹底し、良品の出荷に努めましょう
収穫後、翌年に向けた管理を徹底しましょう
小ぎくの健全な親株を確保・養成しましょう
施設の風通しなどの環境管理に注意しましょう

りんどう

（1）生育概況

早生種はほぼ平年並みの開花となり、おおむね盆需要期に出荷されました。現在晩生種が開花し始め、ほぼ平年並みとなっています。早生種はやや草丈が短く花段数が少ない傾向となりましたが、晩生種も同様で短茎傾向となっています。

病害虫の発生は全般に少なく経過していますが、圃場によっては褐斑病の発生が多く見え始めています。また花腐菌核病は、若干早め～平年並みの発生始めとなっています。

（2）病害虫防除の徹底

ハダニ類：発生は全般に少なめに推移しています。気温の低下に伴い発生は減少しますが、9月中旬頃には越冬成虫が現れはじめ防除効果が低下する（農薬が効きにくくなる）ため、防除が必要な場合は9月上旬までに行い、葉裏へ十分薬剤が付着するように薬剤散布を行います。

アブラムシ類：収穫後に残花の部分を中心にアブラムシ類が多発する場合があります。ウイルス病を媒介すること考えられ、収穫後も防除を継続します。

アザミウマ類：収穫後の残花で増え、多発します。蕾が着色する頃から寄生して花の内部で増殖するので、その時期から防除を徹底し、収穫後の残花の着いた茎部分を折り取ります。圃場周辺の作物や雑草の防除も併せて実施します。

葉枯病：本年の発生は少なめですが、一部上位葉での発生が見られ始めています。秋期にも拡大する場合がありますので、今後収穫する品種と併せ、収穫終了した品種も防除を継続します。

褐斑病：8月以降発生が増加します。本年の6～7月の感染時期の降雨により防除が徹底されなかった圃場での発生が見られます。葉の濡れが数日続くことで感染し、有効な薬剤を株内部に散布するほか、被害茎葉を圃場外に持ち出して処分し、拡大防止に努めてください。

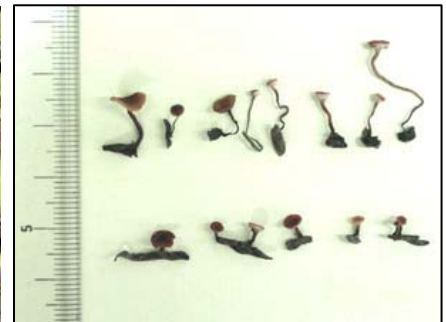
花腐菌核病：菌核にできた子実体（きのこ）から胞子が飛散し、花卉に付着して感染します。気温の低下に伴い、冷涼地から胞子飛散期となるので、地域での着蕾状況を確認して防除情報を参考に適用薬剤での防除を開始してください。



花腐菌核病被害花



株元に形成された子実体



菌核上に形成された子実体

（3）収穫後の管理

収穫後の圃場では防除が手薄になり病害虫が多発する場合があります。翌年の発生源となる

ので、収穫後も防除を継続してください。収穫後の薬剤は葉の汚れへの配慮は不要なのでコスト低減も考慮して選定してください。

害虫や花腐菌核病の防除のため、残花のある茎部分を折取ってください。この作業は株養成のためにも効果的です。また定植年の株でも開花しますので、できるだけ花を摘み取ります。

追肥：早生・中生種で、生育の状況により、収穫後に窒素成分で3～5kg(10aあたり)を施用します。

小ぎく

(1) 生育概況

8月咲き品種と同様に、9月咲き品種は短茎傾向となっています。病虫害では白さび病の発生が多くなっています。ハダニ類、アザミウマ類の発生が見られます。

(2) 圃場管理：キクの根は過湿に弱く、多湿条件下では生育障害が発生します。降雨が続くような場合、長時間圃場に滞水しないよう排水対策を行ってください。逆に乾燥している場合、品質低下や蕾の発達が遅れる原因となりますので適宜かん水を実施します。ただし、長時間水を溜めることや高温時のかん水は避けてください。

(3) 病害対策：白さび病は気温15～23℃、多湿条件で感染しやすくなります。定期散布に加え、降雨前の薬剤散布を行い防除を徹底しましょう。またハダニ類等の害虫の発生が見られるので、十分な薬量を葉裏に散布し防除を徹底します。

(4) 母株選抜・養成：翌年採穂用の母株は、収穫前の選抜を徹底します。特に、えそ病やわい化病の感染株は見つけたい株ごと抜き取り、圃場に残さないようにしてください。また、下葉からの枯れ上がりが見られる株は、根の張りや圃場の状態によるものの他に、土壤病害によるものも見られ、その場合は、翌年の苗にすることで感染が広がることも考えられるので、枯れ上がりの見られる株は極力母株への使用はさけます。

残した株は病虫害防除を継続し、茎葉が伸びた場合は適宜台刈りを行います。またマルチ栽培の場合には収穫後すぐにマルチをはがし追肥と土寄せを行います。

施設花き

(1) 全般

保温にともなう施設の開閉をおこなうこれからの時期は、天気予報を確認して施設内が高温にならないように開閉して換気に努めます。また、循環扇なども活用して灰色かび病等を予防します。

(2) ストック

かん水：活着後は2～3日おきにたっぷりかん水します。最初に根を深く張らせることで後半にかん水を控えても萎れないようになり、品質確保につながります。過剰なかん水は立ち枯れ性病害の発生を助長するので、適量かん水を心がけます。

遮光：活着後は速やかに遮光資材を除去し、十分な日照を確保します。

温度管理：ハウスは開放し、気温が上がらないような管理とし、高温による生理障害や品質低下の発生を防ぎます。

コナガ防除：殺虫剤による防除をしますが、抵抗性獲得を避けるため異なる系統の薬剤をローテーションで使用します。ハウスの開口部を防虫ネット(目合いが1mm以下のもの)でふさぐことも効果的ですが、通気性が悪くなり品質低下の原因となる場合があるので、注意します。

(3) アルストロメリア

夏期間や強光時に行った遮光資材は、日照を十分確保するように除去し花芽の発達を促します。除去する際は葉焼け等の防止のため、晴天時は避け、曇天時に行い徐々に光に慣らします。また、施設の開口部を開放し、風通しをよくすることで品質を確保に努めます。

施肥は、化成肥料や液肥等で肥料切れしないように生育状況に応じて適宜施肥します。

枯れ茎や過剰な葉芽などは間引きます。一時に多量の間引きを行うと後に発生するシュートが細くなるので、少量ずつ数回に分けて間引きます。

農作物技術情報第7号は9月25日(木)発行の予定です。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
発行時点での最新情報に基づき作成しております。
発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間
急ぐより 家族の笑顔を大切に 想う心で ゆとりの仕事